

平成25年度 第1回 東京外環地下水検討委員会

主な意見

1. これまでに実施した地下水位観測について

- 平成22年度以降のこれまでの地下水位観測によって、外環沿線における地下水の全体的な特徴や傾向は、概ね捉えられている。
- 水道用水源井戸周辺の観測井(W-50、W-51、W-53、W-55、W-56、W-58)では、地下水位の頻繁な上昇・下降が認められるが、これは水道用水源の浅井戸での揚水による影響と考えられる。
- 中央JCT・東八道路IC周辺地域を中心として、深層地下水の経年的な水位上昇が認められる。この水位上昇には近年の揚水量減少が関係している可能性があるが、さらに情報を収集して要因の分析を進める必要がある。
- W-24、W-54およびW-88の観測井については、周辺の観測井と異なる挙動を示していることから、周辺の地下水利用の影響も考慮しながら、観測井としての適用性と観測継続の要否を検討する必要がある。
- 環境影響評価時の地下水位観測結果と比較して、浅層地下水では大きな経年的変化は認められない。また、深層地下水では、中央JCT・東八道路IC周辺地域を中心として見られる水位上昇を除けば、大きな経年的変化は認められない。
- 平成23年3月の東日本大震災を境として地下水位変動を生じた観測井が認められる。

2. 今後の地下水位観測について

○これまでに実施した地下水位観測を基本として、地下水位の挙動を把握していくことでよいと考えるが、工事の施工方法や地形地質等も考慮の上、必要に応じて観測井の適切な配置の検討を実施していく必要がある。

なお、本線シールドトンネル直上や開削部分に位置し、工事の施工に支障になると考えられる観測井があることにも留意する必要がある。

○観測結果の確認のため、引き続き周辺における地下水利用の情報収集する必要がある。